

# 新課程における カリキュラム編成の考え方

## — 2013年度の全面実施に向けて〈PART 2〉 —

4月号に続き、各校での実態を踏まえたカリキュラム編成の考え方を紹介する。  
今号では、県下有数の進学校である山形県立米沢興譲館高校と、  
県内で最初の連携型中高一貫教育の実践高校である静岡県立川根高校に、  
カリキュラム決定までの過程と共に、今後の運用面での課題を聞いた。

### 山形県立米沢興譲館高校のカリキュラム

#### 現 状

- 県内屈指の進学校。生徒のほとんどが国公立大を志望
- 2003年の現行課程導入時、SIを徹底的に議論
- 授業時数は55分×6コマ(水曜のみ7コマ)

#### カリキュラム編成方針

- 大学入試だけを目標としない全人教育を軸とする
- 55分×6コマから50分×7コマに変更して、週4コマ増やす
- 行事を精選し、授業時間を捻出

#### カリキュラム編成上の 特徴

- 全体の「器」を広げたため、コマ数減の科目なし
- 国・地歴公民・数・理・英のいずれもコマ数増。特に、文系では国語や地歴公民を、理系では数学や理科を増やした
- 「芸術」「家庭」「情報」は1年生で集中的に履修

#### 運用面での工夫と課題

- 言語活動の教科指導上での実践
- 教職員の会議の効率化

教育委員会への新課程カリキュラム提出に向け、多くの学校で策定の大詰めを迎えているのではないだろうか。今後、課題となるのはカリキュラムの運用面だ。授業時間の枠内で本当に学習内容を教

### 静岡県立川根高校のカリキュラム

#### 現 状

- 山間部に位置する連携型中高一貫教育の実践高校。生徒の学力差が広い
- 特進クラスは週35コマ、普通クラスは週30コマと授業時数に差がある
- 生徒の多様な進路に合わせたメニュー設定に限界が生じる

#### カリキュラム編成方針

- 高校3年間を通じて、コミュニケーション力など社会を生き抜く力を付けさせる
- 生徒のニーズに合わせた「多様性」から「共通性」重視へ転換を図る
- 生徒の学力の変化や学力差の拡大を想定し、カリキュラムに幅を持たせる

#### カリキュラム編成上の特徴

- 特進クラスと普通クラスの授業時数を統一し、1日6コマとする
- 協同的な学習などを通じて、知識を活用する授業を意識する

#### 運用面での工夫と課題

- 出口重視の指導から中学生の実態把握など、入り口重視の指導を模索
- 若手教師を中心に、授業研究により授業力向上を図る

え切れるのか、活用型の授業や言語活動にどう取り組めば良いのかなど、多くの課題がある。完成したカリキュラムをどう運用していくか。2校の考えを紹介する。

# 自校のS Iに応じた、カリキュラムを編成・運用

山形県立米沢興譲館高校

現行課程移行期の議論を踏まえ  
主要教科をバランスよく増やす

七つの議題から  
学校のビジョンを検討

2010年7月、山形県立米沢興譲館高校は新課程に向けて、教務主任や進路指導主事、生徒指導主事らから成る「新ビジョン委員会」を立ち上げた。「新」が付くのは、03年の現行課程への移行時に「ビジョン委員会」を発足させて学校のアイデンティティーを議論した経緯があるからだ。

新委員会の議題は、①学校が目指すもの、②進路指導体制の在り方、③理数科の在り方、④週当たりの授業時数や1コマの時間、⑤学校行事の見直し、⑥土日の活用、⑦部活動の在り方である。た



山形県立米沢興譲館高校  
海和雅人  
Kaiba Masato  
教職歴24年。同校に赴任して15年目。教務主任。



山形県立米沢興譲館高校  
高橋正憲  
Takahashi Masanori  
教職歴19年。同校に赴任して8年目。進路指導主事。

学校プロフィール◎1967年設立の藩校から300年以上の歴史を持つ伝統校。「己を磨き、誠を尽くす」などの興譲の精神を受け継ぐ。  
形態◎全日制／普通科・理数科／共学／1学年約200人  
11年度入試実績（現役のみ）◎国公立大には延べ121人が合格。私立大には延べ146人が合格。

だし、①～③は新委員会では議論に時間を割かないことにした。その理由を教務主任の海和雅人先生は、次のように話す。

「私は旧委員会のメンバーでもありました。当時、この三つに関

静岡県立川根高校

多様なメニュー設定から  
「共通性」重視へ転換

地域唯一の高校として  
社会を生き抜く力を育む

南アルプスの南麓、大井川の清流に位置する静岡県立川根高校は、川根本町と島田市北部から成る川根地区唯一の高校だ。地域に塾はなく、大半の生徒は中学・高校時代を通じて塾や予備校に通うことはない。地域からは「川根高校が無くなると地域が衰退する」との声も聞かれるほど、同校の教育活動への期待は大きい。

同地区にある三つの中学校とは連携型の中高一貫教育を行う。3校から同校に入学する生徒は合計約6割。同校の生徒で3校の出身者が占める割合は97%以上だ。



静岡県立川根高校副校長  
浅川典善  
Asakawa Fumiyoshi  
教職歴30年。同校に赴任して2年目。

学校プロフィール◎1963年、自宅から高校への通学が地理的に困難だった地域の強い要望を受け、藤枝東高校の分校として開校。地元の三つの中学校と連携型中高一貫教育を展開。  
形態◎全日制／普通科／共学／1学年約70人  
11年度の進路実績（現浪計）◎4年制大37人（うち国公立大6人）が合格。短大8人、専門学校13人、就職13人。

必然的に入学者の学力の幅は広い。2007年度には「特進クラス」を設けて大学進学指導体制を強化したこともあり、ここ数年で4年制大進学者数が増え、学年の半数にまで達した。この他、専門学校が2～3割、就職が約2割といった状況だ。

こうした多様な学力と進路意識

としては徹底的に議論して、固めたという経緯があります。当時の結論を堅持するという前提で、新委員会の議論を行いました」

新委員会で約3か月間議論した末、カリキュラムの枠組みが決まった。まず、④授業時数は、現行の55分授業6コマ（水曜のみ7コマ）の週31コマから、50分授業7コマの週35コマとした。

「新課程では特に理科の単位数が増えるため、カリキュラムそのものの『器』を大きくしなければならぬ」という結論になりました」（海和先生）

⑤学校行事については、現行課程導入時に精選していたが、更に見直すことにした。担当の教師が1990年度～2010年度の行事を全て洗い出し、一覧表を作成して検討。その結果、2日間かけて行っていた体育祭の時間を削減して2コマ分の授業を入れるなど、同校のカラーを失わないように配慮しつつ行事を縮小した。

⑥土日の活用では、2年生までは補習などを行わずに、部活動などに専念させることにした。

⑦部活動は、1日が7コマになることで放課後の練習開始が遅くなるが、終了時刻は従来のままにした。限られた時間の中でいかに効果的に練習するかを、生徒に課した形となる。

### 全体の「器」を広げ、 コマ数減の教科を出さない

新委員会の方針を土台に、10年11月からは「教育課程検討委員会」を立ち上げ、具体的なカリキュラムの検討に入った。

策定手順には二つの特徴がある。一つは、先に13年度のカリキュラムを策定し、12年度のカリキュラムはそれを反映させて作成したこと。もう一つは、全ての教師がSIを理解した上で各教科に要望を聞き、叩き台を作ってから会議に諮る作業を繰り返したことだ。「会議で各教科の要望を聞いても、議論の收拾がつかなくなる可能性がありました。そこで、素案を提示してから意見を聞くという方法にしました」（海和先生）

その結果、11年1月にはカリキュラムが完成。コマ数を増やし

を持つ生徒たちを全員、無事に卒業させ、どのような道に進んでも社会で生き抜いていく力を付けさせること。これが同校の使命であると共に、カリキュラム編成の基本方針ともなった。

### 「学士力」につながる 共通の基礎学力を意識

同校が掲げた方針は二つある。一つは「メニューの多様化」から「共通性重視」への転換だ。浅川典善副校長は次のように説明する。

「本校は、これまで生徒の多様な希望進路に合うようなカリキュラムを組んでいましたが、カリキュラムを多様化させればさせるほど、生徒の学力も多様化してしまふという課題もありました。まだ10代の生徒が進路や科目を決定するのは本来的には難しいことで、安易な選択をしがちです。多様化が限界に來ていると考え、先生方に新課程を機に共通性を高め、ていくことを意識してもらいました。この多様性から共通性への流れは、新課程の精神とも足並みをそろえるものです。新課程では、

国語総合と数学Ⅰ、コミュニケーション英語Ⅰの3科目が共通必修科目となりました。これは、どの生徒にも必要な基礎学力を明確に示したと言えます。大学の学士課程教育の見直しで話題になった『学士力』も、グローバルスタンダードの中の基礎学力と位置付けられると思います。三つの科目は学士力につながる共通性とも捉えられるのです」

同校は新課程のカリキュラムでは選択科目を精選し、国語、数学、英語の基礎的な科目を重視した。また、特進クラスは現在ゼロ時間目として50分の授業を毎日行い1日7コマとし、普通クラスはその時間帯に30分間の朝読書やドリル学習を行っている。12年度には全クラス1日6コマに統一し、放課後の活動を充実させ、家庭学習の時間も確保させたいと考えている。

### 知識の習得から活用へ 授業づくりも転換

二つめは「幅を持たせた編成」とすることだ。

「新課程では小・中学校で学習

た分は、国語・地歴公民・数学・理科・英語などに当て、その他の教科は現状維持とした。進路指導主事の高橋正憲先生は、「授業時数が削減される教科が無いので、大きな反対もなくカリキュラムが決まりました」と話す。

1年生で増やした4コマには、理科2コマ、英語1コマ、「芸術」1コマを当てた。「芸術」は、現行課程では1年生と2年生で各1単位だったが、1年生でまとめて2単位取得とした。「家庭」「情報」も1年生での履修と位置付けた。普通科の文系・理系と理数科に分かれる2年生からは、文系では国語や地歴公民を、理系では数学や理科を増やした。理数科に学校設定科目として設けている「生涯科学」は1、2年生で履修させていたが、2、3年生に変更してより専門的な指導に重きを置くことにした。

## 言語活動の充実など 運用面を検討

カリキュラム編成は終了したが、運用面での課題は残る。その

一つは、言語活動の充実だ。数学担当の高橋先生は、「学級全体に向けて話し掛けても、自分のことだと受け止めない生徒が増えたと感じます。また、問題文が長いと、正しく意味を読み取れない生徒もいます。数学でも、計算や問題を解く技能だけでなく、言語活動を意識して教えていかなければならないと痛感しています」と話す。

物理担当の海和先生も、「物理の学力はかつて数学との相関が強いと考えていましたが、ここ数年、読み取る力との相関が強くなっていて感じています」と指摘する。朝読書として週1回10分間の「思索のとき」を設けているが、教科指導の中での更なる工夫が求められている。

また、職員会議は、授業時数が増えるため、時間の確保が難しくなる。海和先生は、「全体の職員会議と何人かの委員会的な会議の切り分けがこれまで以上に大切になります」と話す。一人1台支給されているパソコンによる情報共有策なども検討し、効率的な運営を目指している。

内容が大幅に増えます。その結果、授業についていけない子どもが増え、本校への入学生の学力差が更に拡大する可能性があります。学力の変化が大きいと予測される教科・科目を中心に幅を持たせたカリキュラムを組み、生徒の実態に合わせて運用できるようにする予定です。また、中高の連携を更に活用すれば、入学者個々の学習課題を解決していくことも可能ではないかと考えています」

今回のカリキュラムの編成が終了した今、これまでの勤務校での経験も踏まえて浅川副校長は、今後の課題を次のようにまとめた。

「以前は3年生で受験に必要な科目を集約的に履修させたり、学校行事を秋から春に移したりと、出口の大学入試を考慮してカリキュラムを編成してきました。しかし、大学入試競争が緩和した今、本校のような学校では出口よりも入り口を重視したカリキュラム編成をすべきだと考えています」ただし、浅川副校長がカリキュラム編成以上に重要だと考えるのは、カリキュラムの「運用」だ。

「情報化社会の進行により、知識を個人が所有するのではなく、皆で共有しながらイノベーションを生み出す時代になりました。学校現場にデジタル端末が導入されれば、教師の知識以上のことを生徒がすぐに調べられます。そうすると、知識をいかに効率的に教え込むかという授業は通用しませんが新しい発想を生み出すような活用型の授業が求められます」

1年生の朝学習の時間ではこれまで漢字や計算のドリル学習をしていたが、考えなければ解けない手作りの問題を増やした。これには授業の振り返りも含まれており、多くの学校で課題となっている授業内容の定着を図るための家庭学習指導にもつながる。

教師が指導力を付けることが、新任や2校目の若手教師が多い同校にとって喫緊の課題だ。

「カリキュラムをいかに実行するか、授業の進め方が問われています。協同的な学習を取り入れながら、授業力と生徒の学力の向上を図っていききたいと思います」